第37回全国介護老人保健施設大会
シンポジウムⅣ「高齢者医療の最前線」

高齢者のポリファーマシーとその対策



社会福祉法人邦友会国際医療福祉大学 成田老年医療福祉センター　老健オルタンシア　施設長
国際医療福祉大学医学部　老年病学　教授
小島　太郎

2026年10月23日 ライトキューブ宇都宮

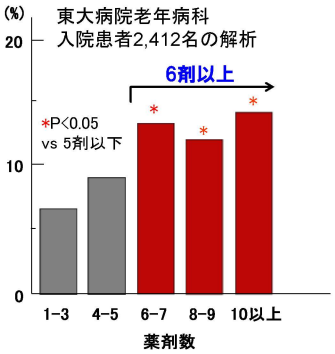
COI 開示

発表者名：　小島太郎

演題発表に関連し、発表者に開示すべき COI 関係にある企業などはありません。

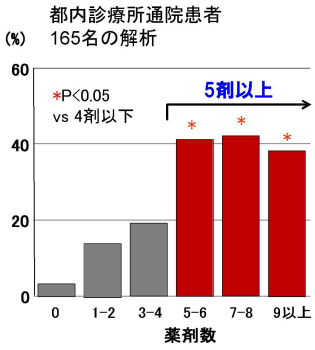
高齢者のポリファーマシーと薬物有害事象

1）薬物有害事象の頻度



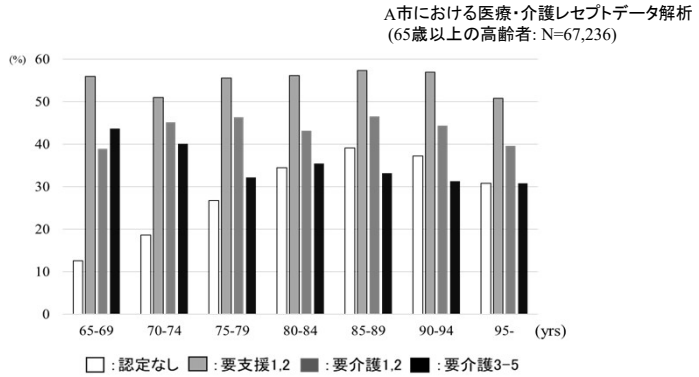
Kojima T, Akishita M, et al.
Geriatr Gerontol Int 2012 より図を改変

2）転倒の発生頻度



Kojima T, Akishita M, et al.
Geriatr Gerontol Int 2012

高齢者の多剤服用（5種類以上）と要介護認定



Kojima T, Hamaya H, Akishita M, et al. Arch Gerontol Geriatr 2023

©2026 公益社団法人全国老人保健施設協会

老健における薬剤使用の実態は？

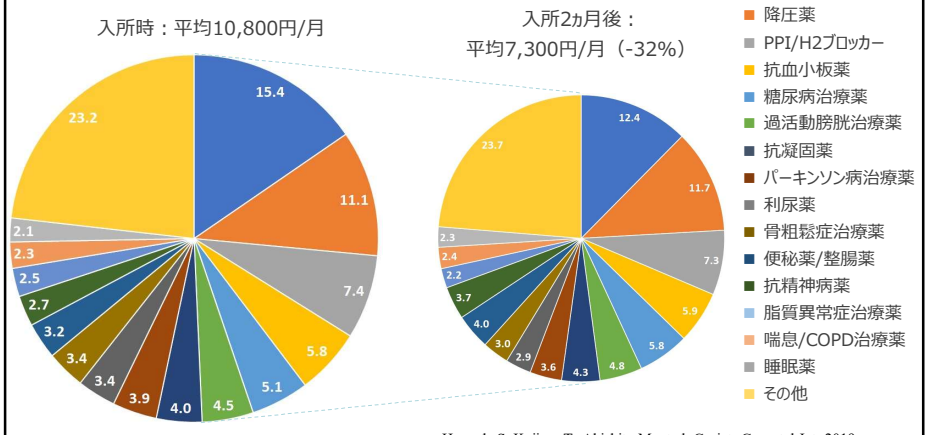
平成27年全老健調査事業：老健入所者の薬剤に関する調査

1. 潜在的な薬物間相互作用
2. 心血管系予防・治療薬の処方
3. 認知症者への抗認知症薬・向精神薬・抗コリン薬の処方

- 全国老人保健施設協会加盟施設に調査票送付
- 薬剤処方データ収集（入所時と入所2ヵ月後の比較）
  - 回答施設：350施設（回収率10%）
  - 対象者：最大1,324人

5

薬剤にかかる費用（薬価ベース）



Hamada S, Kojima T, Akishita M, et al. Geriatr Gerontol Int. 2019

1．老健における潜在的な薬物相互作用

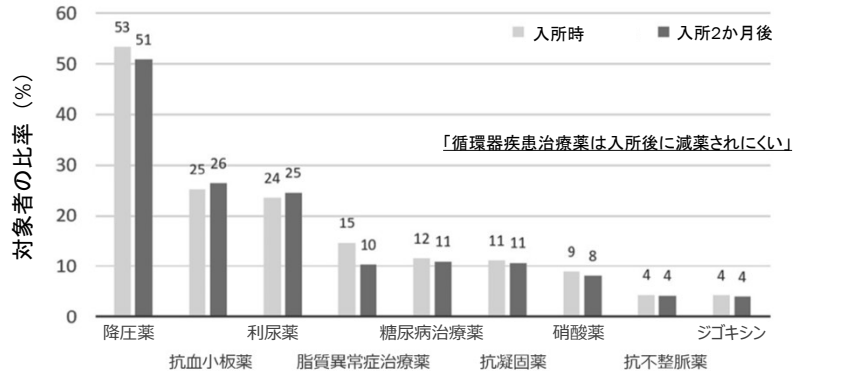
- 薬物代謝酵素（CYP）を介した潜在的な薬物相互作用
  - 効果増強による**有害事象リスクの増大**、効果の減弱による病状悪化、など
- 2種類以上の服用の入所者の**2.7%**に薬物相互作用の組み合わせ有
- 下図のとおり、薬剤数の増加に伴い、薬物相互作用の組み合わせは著増

薬剤種類数	N	潜在的な薬物間相互作用	調整後オッズ比（95%信頼区間）	P値
2〜5	639	7 (1%)	Reference	–
6〜9	462	15 (3%)	2.84 (1.15 to 7.02)	0.024
≥10	121	11 (8%)	7.82 (2.96 to 20.70)	<0.001

- 関与する薬物：ベンゾジアゼピン、PPI、Ca拮抗薬、抗てんかん薬 など

Hamada S, Ohno, Y, Kojima T, Akishita M, et al. Geriatr Gerontol Int. 2019

2．老健における心血管系予防・治療薬の増減



Hamada S, Kojima T, Akishita M, et al. Arch Gerontol Geriatr. 2020

©2026 公益社団法人全国老人保健施設協会

3．認知症者に対する抗認知症薬・向精神薬 処方の変化

	入所時 %	入所2ヵ月後 %	P値	減薬 入所時の利用者に対する%
抗認知症薬	**19.4%**	**13.0%**	**<0.001**	**36.1%**
向精神薬	**44.3%**	**42.8%**	**0.089**	**23.2%**
睡眠薬	25.1%	22.6%	0.002	19.3%
抗精神病薬	13.2%	13.6%	0.535	19.0%
抗不安薬	12.3%	10.7%	0.003	22.3%
抗うつ薬	7.4%	6.7%	0.134	16.9%
抗てんかん薬	7.1%	7.8%	0.049	4.7%
抗コリン作用を有する薬物	**35.2%**	**36.6%**	**0.141**	**26.1%**
H2ブロッカー	13.5%	15.9%	<0.001	12.3%
抗精神病薬	8.8%	9.4%	0.336	21.7%
過活動膀胱治療薬	6.1%	5.7%	0.541	19.2%
パーキンソン病治療薬	4.7%	4.5%	0.774	12.5%
抗うつ薬	4.6%	4.6%	1.000	14.5%

重度認知症者で減薬 多い

「抗認知症薬は減らされるが、抗精神病薬は減らない」　Hamada S, Kojima T, Akishita M, et al. BMJ Open. 2021

高齢者の安全な薬物療法ガイドライン2025



「特に慎重な投与を要する薬物」のリスト

- 重篤な有害作用が出る可能性が高い薬剤
- 有害作用の頻度が多い薬剤
- 代表的な薬物：　向精神薬や抗コリン薬

本ガイドラインの注目ポイント

① **高齢者総合機能評価、多職種協働の推進**
② **2015年版以来、「薬剤師の役割」が明確に**
③ **「特に慎重な投与を要する薬物」が普及**

薬剤起因性老年症候群と主な原因薬剤

症候	薬剤
ふらつき・転倒	降圧薬（特に中枢性降圧薬、α遮断薬、β遮断薬）、**睡眠薬、抗不安薬、抗うつ薬（三環系）**、抗てんかん薬、**抗精神病薬（フェノチアジン系）、抗パーキンソン病薬（トリヘキシフェニジル）、抗ヒスタミン薬**、メマンチン
抑うつ	中枢性降圧薬、β遮断薬、**H2ブロッカー、抗不安薬、抗精神病薬**、抗甲状腺薬
記憶障害	降圧薬（中枢性降圧薬、α遮断薬、β遮断薬）、**睡眠薬・抗不安薬（ベンゾジアゼピン）、抗うつ薬（三環系）**、抗てんかん薬、**抗精神病薬（フェノチアジン系）、抗パーキンソン病薬、抗ヒスタミン薬（H2ブロッカー含む）**
せん妄	抗パーキンソン病薬、**睡眠薬、抗不安薬、抗うつ薬（三環系）、抗ヒスタミン薬（H2ブロッカー含む）**、降圧薬（中枢性降圧薬、β遮断薬）、ジギタリス、抗不整脈薬（リドカイン、メキシレチン）、気管支拡張薬（テオフィリン、ネオフィリン）、副腎皮質ステロイド
食欲低下	**非ステロイド性消炎鎮痛薬（NSAID）**、アスピリン、緩下剤、**抗不安薬、抗精神病薬、トリヘキシフェニジル、SSRI、ChE阻害薬**
便秘	**睡眠薬・抗不安薬（ベンゾジアゼピン）、抗うつ薬（三環系）、膀胱鎮痙薬、腸管鎮痙薬（ブチルスコポラミン、プロパンテリン）**、H2ブロッカー、αグルコシダーゼ阻害薬、**抗精神病薬（フェノチアジン系）、トリヘキシフェニジル**
排尿障害・尿失禁	**抗うつ薬（三環系）、腸管鎮痙薬（ブチルスコポラミン、プロパンテリン）、膀胱鎮痙薬、H2ブロッカー、睡眠薬・抗不安薬（ベンゾジアゼピン）、抗精神病薬（フェノチアジン系）、トリヘキシフェニジル**、α遮断薬、利尿薬

青字：向精神薬
緑字：抗コリン作用を有する薬剤

老年症候群の症状の治療のうち、33.9%が薬剤起因性老年症候群である可能性

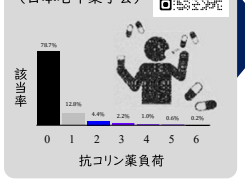
Hasegawa S, GGI, 2023

（高齢者の安全な薬物療法ガイドライン2025）

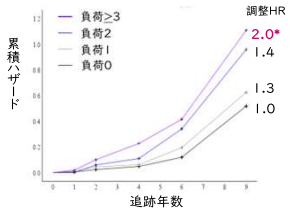
日本版抗コリン薬リスクスケール（JSGP）による抗コリン薬負荷量は地域在住高齢者のフレイルやサルコペニアの高いリスクと関連

Design
デザイン：千葉県柏市地域在住高齢者を対象としたコホート研究　追跡調査（四分位範囲）：6.0 [4.0-9.0] 年
対象者　：ベースライン時にサルコペニアを認めなかった高齢者1,549人（平均年齢72.5±5.5歳、女性49.1%）
アウトカム：フレイルの新規発症（CHS基準）、サルコペニア新規発症（AWGS2019基準）

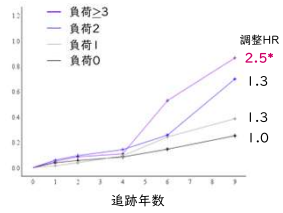
Exposure
抗コリン薬負荷量
日本版抗コリン薬リスクスケールで評価（日本老年薬学会）



Outcome1
フレイル新規発症



Outcome2
サルコペニア新規発症



個人特性・疾患、服用薬物数、潜在的な不適切処方（STOPP-J）の影響を考慮

Tanaka T, Akishita M, Kojima T, et al. *Geriatr Gerontol Int* 2025.

©2026 公益社団法人全国老人保健施設協会

処方見直しのプロセス

病状、認知機能、ADL、栄養状態、生活環境、内服薬（他院処方、一般用医薬品等、サプリメントを含む）、薬剤の嗜好など**を高齢者総合機能評価（CGA）**などを利用して総合的に評価

関係する多職種からの情報を共有可能な範囲で協議も

ポリファーマシーに関連した問題点を確認する
- □薬物有害事象の存在
- □服薬アドヒアランス不良、服薬困難
- □特に慎重な投与を要する薬物の使用など
- □同効薬の重複投与
- □腎機能低下
- □低栄養
- □薬物相互作用の可能性
- □処方意図が不明な薬剤の存在

あり

薬物療法の適正化（中止、変更、継続の判断）以下のような点を踏まえて判断する
- □推奨される使用法の範囲内での使用か
- □効果はあるか
- □減量・中止は可能か
- □代替薬はないか
- □治療歴における有効性と副作用を検証する
- □最も有効な薬物を再検討する

なし

あり

他の職種から薬物療法に関連した問題の報告
※　**多職種協働**

病状等（薬物有害事象、QOL含め）につき経過観察

あり

薬物療法に関連した新たな問題点の出現
- □継続に伴う有害事象の憎悪
- □減量・中止・変更に伴う病状の悪化
- □新規代替薬による有害事象

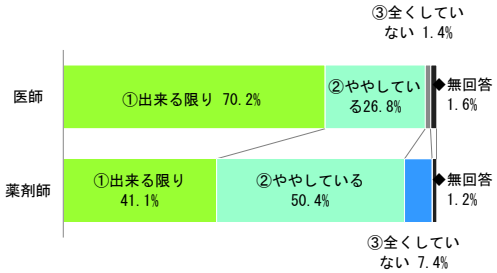
なし

慎重に経過観察

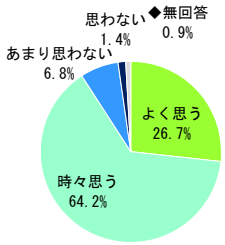
厚生労働省「高齢者の医薬品適正使用の指針（総集編）より （2018年）

多職種（医薬）協働の可能性

ポリファーマシー対策を実施していますか？



薬剤師：　医師に対して減薬の提案をしたいと思うか?



神奈川県保険医協会会員施設 563施設 および 神奈川県薬剤師会会員施設 1088施設 へのアンケート調査

川口千佳子、湯浅章平、小島太郎、ほか. 日本老年薬学会雑誌7:25–33, 2024

老健入所者の食事と生活習慣病の改善(1)

入所後3か月間の変化、N=69名、平均86±6歳、女性86%

	入所時	3ヶ月後	P 値
全体(n = 69)			
BMI (kg/m²)	21.6 ± 3.7	21.3 ± 3.8	0.002
1日エネルギー摂取量(kcal)	1,408 ± 285	1,448 ± 268	0.003
血清アルブミン(g/dL)[b]	3.3 ± 0.5	3.5 ± 0.5	0.008
ICF ステージング			
基本動作	3.9 ± 1.2	4.2 ± 1.1	0.013
歩行移動	2.2 ± 0.8	2.5 ± 0.9	<0.001
食事動作	4.3 ± 1.2	4.5 ± 1.1	0.061

Maruoka, H., Kojima T, et al. Medicine (Baltimore), 2023

老健入所者の食事と生活習慣病の改善(2)

入所後3か月間の変化、N=69名、平均86±6歳、女性86%

高血圧 患者(n = 60)	入所時	3ヶ月後	P 値
収縮期血圧 (mmHg)	127 ± 17	124 ± 15	0.136
拡張期血圧(mmHg)	74 ± 11	72 ± 10	0.029
薬剤数	6.9 ± 2.9	5.9 ± 3.1	0.0496
脂質異常症患者 (n = 29)			
HDLコレステロール(mg/dL)	50 ± 13	51 ± 13	0.208
トリグリセライド (mg/dL)	98 ± 34	99 ± 32	0.498
LDLコレステロール(mg/dL)	81 ± 28	85 ± 24	0.341
薬剤数	7.8 ± 2.7	6.2 ± 3.4	0.026
糖尿病患者　(n = 13)			
空腹時血糖値 (mg/dL)	105 ± 48	117 ± 28	0.425
HbA1c (%)	6.8 ± 0.8	6.9 ± 0.9	0.633
薬剤数	6.2 ± 3.0	4.8 ± 3.3	0.049

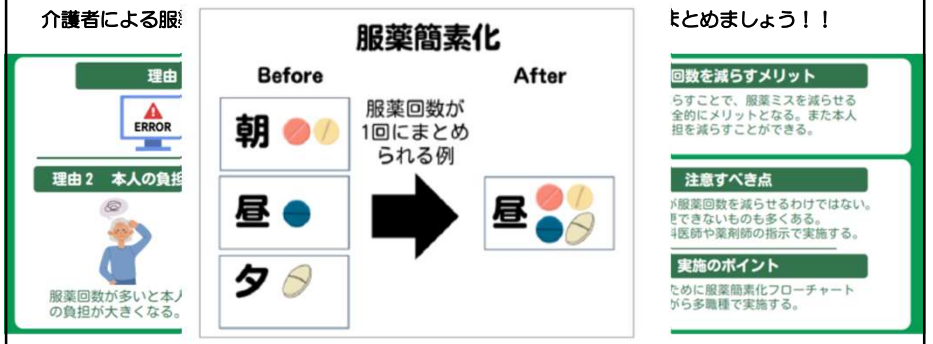
Maruoka, H., Kojima T, et al. Medicine (Baltimore), 2023

©2026 公益社団法人全国老人保健施設協会

処方の工夫と服薬支援の主な例

服用薬剤数を減らす	● 力価の弱い薬剤を複数使用している場合は、力価の強い薬剤にまとめる ● 配合剤の使用 ● 対症療法的に使用する薬剤は極力頓用で使用する ● 特に慎重な投与を要する薬物のリストの活用
剤形の選択	● 患者の日常生活動作（ADL）の低下に適した剤形を選択する
用法の単純化	● 作用時間の短い薬剤よりも長時間作用型の薬剤で服用回数を減らす ● 不均等投与を極力避ける ● 食前・食後・食間などの服用方法をできるだけまとめる
調剤の工夫	● 一包化 ● 服薬セットケースや服薬カレンダーなどの使用 ● 剤形選択の活用（貼付剤など） ● 患者に適した調剤方法（分包紙にマークをつける、日付をつけるなど） ● 嚥下障害患者に対する剤形変更や服用方法 （簡易懸濁法、服薬補助ゼリー等）の提案
管理方法の工夫	● 本人管理が難しい場合は家族などの管理しやすい時間や服薬をあわせる
処方・調剤の一元管理	● 処方・調剤の一元管理を目指す（お薬手帳の活用を含む）

高齢者施設での服薬簡素化の概要



Maruoka H, Akishita M, et al. Geriatr Gerontol Int. 2025

老健における薬剤見直しの評価の充実
（2024年度診療報酬改定後）

かかりつけ医連携薬剤調整加算

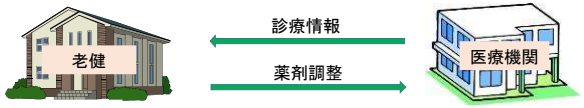
平成30年度診療報酬・介護報酬改定で新設→　2021年度および2024年度に改訂

・加算Ⅰ　イ：入所前の主治医と連携して薬剤を評価・調整した場合　（140単位）変更

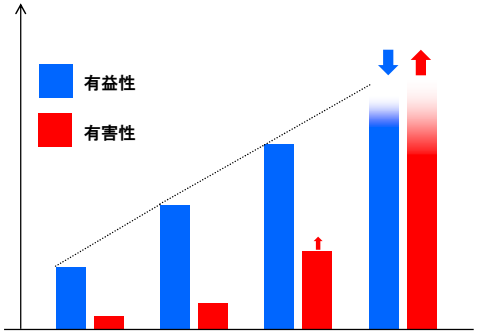
　　ロ：施設において薬剤を評価・調整した場合　（ 70単位） 新設

・加算Ⅱ…加算Ⅰに加えて、服薬情報をLIFEに提出　（240単位）

・加算Ⅲ…加算Ⅱに加えて、退職時に入所時と比べ1種類以上減薬　（100単位）



薬剤数とその有益性・有害性（イメージ）



有益性低下の要因
- 服薬アドヒアランス低下
- 他の合併症の存在
- 薬効の低下
- フレイル・要介護状態

など

有害性増加の要因
- 副作用の確率↑
- ハイリスク薬の使用頻度↑
- 薬物相互作用↑
- 同系統薬複数処方による効き過ぎの危険性↑

など

Kojima T, Mizokami F, Akishita M. *Geriatr Gerontol Int* 2020

©2026 公益社団法人全国老人保健施設協会